19世紀末期におけるドイツ中等学校での生徒体育クラブについて

——プロイセンにおける生徒体育クラブの誕生を中心に——

新井 博 (福井大学教育学部)

Über die Schülerturnvereine der höheren Schulen in Deutschland der letzten Periode des 19 Jahrhunderts in Preußen : hauptsächlich über die Ursache der Entstehung der Schülerturnvereine in Preußen

Hiroshi ARAI (Universität Fukui)

Pädagogische Fakultät der Universität Fukui
3-9-1 Bunkyo, Fukui, (910)

Zusammenfassung

Im Jahr von 1880 waren die Schülerturnvereine der höheren Schulen in Preußen begründet. Von den Ursachen ihrer Entstehung ist aber noch nichts bekannt. Die Absicht dieser Abhandlung liegt darin, die Ursachen der Entstehung zu erläutern. Es gab in den höheren Schulen in den 1880er Jahren negativ beeinflussende Schülergruppen. Sie rauchten Zigaretten, tranken Alkohol und trieben Unfug, wie die Studenten damals gern machten. Dazu war der Turnunterricht in der Schule war nicht so gut, daß er viele Schüler nicht befriedigen konnte. Deshalb führten einige Schulen nach einigen Idee die Schülerturnvereine ein, um diese Umstände zu verbessern.

I. 問題意識

プロイセンにおいて体育授業が広く普及するのは、20世紀を迎えてからのことである。しかし、プロイセン政府は、すでに19世紀の中頃から小学校・中等学校・ゼミナールで体育授業の実施を奨励していた。そのため1880年頃には体育授業は、中等学校をはじめとする先駆的な学校で実施されるようになっていた。また、同じく1880年頃より課外において、体育を目的とした生徒によるクラブ (Schülerturnvereine=生徒体育クラブ) が、いくつかのギムナジウムを初めとする中等学校で誕生してくるようになってきた。

ところが体育授業に関しては、これまでユー

バーホルストや成田十次郎を初めとする研究者により積極的・継続的に研究が行われてきているが、生徒体育クラブについての研究は、ハーヨー・ベルネットやルドガー・ヨーニッシュハイトとユルゲン・ビンケルマン (共著) によるものを除けば殆ど見当たらない状況である。^{註1}

更にベルネットの研究も、とりわけ1930年以降の生徒体育クラブのあり方を国家のファシズム化との関係で特徴づけたに留まっていた¹⁾。またヨーニッシュハイトとビンケルマンの研究においても、1880年頃から1920年頃迄の生徒体育クラブの概要を明らかにしているが、誕生については単に生徒の不摂生な生活態度を取り除くために、学

校が教師の監視の下で活動するクラブを導入したと述べているに過ぎず、その原因についてまでは明らかにしていないのである²⁾。

以上のことから、当時の中等学校の生徒たちの一般的な状況を考えてみる時、何故、学校に改めて生徒体育クラブが誕生しなければならなかったのかといった疑問が生まれてくるのである。その状況とは次のようなものである。

- ① 当時ドイツのギムナジウムを初めとする中等学校は、制度上殆どの場合午前中で授業が終了し、生徒たちは午後には自宅に戻ることが一般的であったこと。
- ② 教師の側からみても当時のドイツでは、午前中が原則的な勤務時間であり、放課後まで生徒をみることはあまり考えられなかったこと。
- ③ 地域での体育活動からみても、中等学校で生徒体育クラブを創らなくともドイツ体育連盟（Deutsche Turnerschaft）の地方組織（地域体育会＝Turnverein 個々の体育クラブを指す）^{註2} が各町に存在しており、生徒たちは活動する機会を待っていたこと³⁾。

そこで本稿では、当時プロイセンのギムナジウムを初めとする中等学校に生徒体育クラブが誕生した経緯を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法について

ここで生徒体育クラブが誕生した原因を新たに解明するには、これまで先行研究で明らかにされていなかった、クラブを導入した学校の意図について鮮明にすることが重要であると思われる。

そのために、19世紀の末期に生徒体育クラブが誕生した中等学校に共通した状況を探り、学校がどのような対応を企図して導入したのか、その目的と導入について当時の体育雑誌（Monatschrift für das Turnwesen＝M. T.）及び関連する著書を中心に明らかにする。また、学校側からの視点だけではなく、当時の生徒が置かれた状況を考え合わせた、生徒の側からの必要性について当時の体育雑誌（同上）及び関連する著書から明らかにする。

III. 1880年代の生徒体育クラブが誕生した学校の状況

1. 無許可の生徒集団を温床とした生徒の不摂生な生活態度の横行

生徒体育クラブを導入した中等学校に共通した状況とは、放課後生徒たちに青少年として好ましくない、不摂生な生活態度をとる風潮がみられたことであった。無論、学校側はそれらを極めて深刻な問題として受けとめていた。当時、大学の学生たちは将来を嘱望された階級的エリートであったが、中には集団をつくり過剰な飲酒や喫煙、それにともなった暴力行為など、社会的な規範を逸脱した粗暴な振舞を繰り返す者が存在していた。それを特にギムナジウムの高学年の生徒たちが真似して、自分たちで勝手につくった生徒の集団を温床に、大学生がするような不摂生な振舞に興じていたのであった。特に1887年にザクセンで開催された校長会議の席上で体育教師フォーレットが発言した内容は、問題となった大学生の態度の真似によって生じた、生徒の不摂生な生活態度とその性質を顕著に言い表している。「秘密に存在する生徒たちの集団は、学校の規則や道徳をおよそ害する根本悪に属している。そのような集団が理想的な目標を追求しても、賞賛されるような集団になれるはずはない。酒を飲むことや、刀で傷つけ合うこと、大声で歌うこと等は、決して結束のとれた状態とは言い難いのである。ところが、大学生の粗暴な振舞の真似は、若い1・2年生にとって、極めて価値のあるものに映っていた。つまり、常識からはみ出した無作法な大学生の集団が、これらの1・2年生たちの身体や精神を確実に害していると言えるのだ」⁴⁾。

また、同様に教育学者のポニッカウは彼の著書（『禁断の生徒クラブ』1911年）の中で、多くの学校で抱えていた生徒たちの不摂生な生活態度が、度々プロイセンの校長会議で取りあげられたことや、大勢の教師たちがこれらの状況に強い不満を抱いていたために、自分（教師）から積極的に意見を述べたことを明らかにしている⁵⁾。

つまり、当時の多くの中等学校には大学生の態度を真似て、不摂生な振舞に興じる生徒たちが多く存在していた。そのため、それらは多くの学校で極めて切迫した重要な問題として受けとめられ、開催された校長会議や教師たちの会議などで度々議題として取りあげられていた。

2. 生徒たちの運動への欲求の高まり

しかし生徒体育クラブの誕生した学校では、共通して、生徒たちの運動に対する積極的な姿勢がみられた。ヴィースバーデンのギムナジウムで体育を担当していた体育教師ギュールは、自己の担当していた体育授業でみられた生徒たちの様子を、「最高学年のクラスから最低学年のクラスまで約500人の生徒の体育を受け持ったが、異常に熱心なクラスでは週2回の授業では決して十分な満足を得られないようであった。・・・全クラスの生徒たちが体育授業に対して異常な熱心さをもっていった。さらに体育に楽しさと愛着をもって没頭していた」⁶⁾と報告している。

まだ当時の中等学校で行われた体育授業は、同じ時間帯に複数のクラスを併せて実施しなければならなかったことや、他のギムナジウムの生徒たちと一緒に体育館を使用しなければならないような、体育教師や体育館をめぐるの困難な事情があった。そのため生徒たちの中には、学校で行われる体育授業だけでは決して満足を得られない者たちが存在していた。

1890年10月4日より17日までプロイセンの文部省で「学校問題に関する会議」が開催され、同席上で教育家のクロパチェックは生徒たちの体育への意識を、「私が地方のギムナジウムを訪れたとき、生徒は自分たちの身体を鍛えるために、改め

て時間を作っている。それは自分たちの意志からそうしてきたのであり、誰がみても以前との違いに驚くほど」⁷⁾運動への意欲が高まってきていることを指摘している。また、ブレスラウの中等学校の教師コッタは自分の学校の生徒たちが運動への欲求の高いことの証拠について、年度調査の結果を基に「1892/93年と1893/94年に行われた調査で体育を受講しない生徒は、僅か5パーセントのみであった」⁸⁾ことを報告している。また、コッタは自分が直接「同時期に運動の抑制を生徒に告げたときに、一人の生徒が私に対して週2回の体育授業では不十分であり、教師たちの自由になる時間を使い、自分たち（生徒たち）の体育をみてくれるように、強く願い出ていた」⁹⁾ことを経験したとしている。

このように中等学校で生徒の運動欲求が高まった背景には、当時多くの学校で体育教師が不足していた為に、一人の教師が同じ時間帯に複数のクラスを併せて受け持たなければならなかったことや、体育館・運動場を持った学校が少なかったために他の学校の生徒たちと、一緒に体育館・運動場を使用しなければならないような状況があったのである¹⁰⁾。

1895年当時プロイセンには、中等学校として270校の9年制ギムナジウム（Gymnasium）、55校の年制実科ギムナジウム（Realgymnasium）、

表1. 学校によって運動のために使用された場所

	所有の 運動場	校庭	体操場	空き地	練兵場
ギムナジウム・・・・・・・・	27	18	14	151	8
プロギムナジウム・・・・	1	3	3	30	2
実科ギムナジウム・・・・	13	2	5	48	4
実科プロギムナジウム・・	3	3	5	43	1
上級実科学校・・・・・・・・	—	4	—	14	—
実科学校・・・・・・・・・・	4	1	3	31	7
合 計	45	31	30	317	22

(Jahrbuch für Jugend und Volksspiele, H. 4, S. 274, 1895.)

22校の9年制実科高等学校（Oberrealschule）、66校の7年制プロ実科学校（Prorealschule）、81校の7年制実科学校（Realschule）が存在していた¹¹⁾。上記の表1にみられるとおり（体育館は除かれているが）、当時体育授業のための運動場や体操場を持っていた学校は非常に少なかったのである。そして、多くの学校が、体育授業のために空き地等を利用せざるをえない状況にあったことが理解される。

IV. 学校による生徒体育クラブ導入の目的

1. 生徒の不摂生な生活態度の改善

学校は先のような生徒たちの状況を、どのように受けとめていたのであろう。大学生の不摂生な生活態度を真似る生徒たちが如何なる影響を受けるかについて、学校側は共通して「確実に彼ら（生徒）の身体や精神を害するようになり、青年期に必要な体力や道徳性を満足に養えない状況をつくりだしている」¹²⁾と受けとめていた。そのことから、これらの問題の温床となった生徒の集団に対して、学校側は「多くが初めのうちは礼儀をわきまえて活動したが、それも長い時間を経ないうちに怠惰になっていった。・・・学校の使命としては、これらの集団の存在を認めるわけにはいかない」¹³⁾と考えていたのであった。

また、教育学者のポニッカウも彼の著書のなかで、これらの状況によって「多くの生徒たちが彼らの身体や精神を蝕まれ、青年期に養われなければならない体力や道徳性が不十分なまま成長する結果となる。・・・そういった状況を生み出している秘密集団（生徒の集団）の厳然たる克服が必要であった」¹⁴⁾と、学校側の受けとめ方と全く同様のことを述べている。つまり、学校側や教育学者は不摂生な生活態度が生徒たちに悪い影響を与えており、それらの温床となる生徒の集団を、一刻も早く各学校から排除しなければならないと考えていたのである。

2. 生徒体育クラブによる優れた体育的・教育的効果のあらわれ

また他の学校が生徒体育クラブを導入した狙いとして考えられたことには、既に導入した学校において、体育や教育において優れた効果がもたら

されていたことがあげられる。1890年に開催された第9回「全ドイツ体育教師会議」（カッセルで開催）で、当時著名な体育指導者であったカール・オイラーは生徒体育クラブによる優れた影響について、自分の経験から次のように報告している。

「クラブ内での運動（Bewegung）の可能な限りの自由さが、（生徒に）最大限の自己決定・自治・自己指導を可能にしている。これらの体育クラブは、明らかに我々には価値があると思われ、また再三そのように言われてきている。活気に満ちた身体活動をともなった彼らのクラブ以上に、（生徒の）倦怠を吹き飛ばす方法は無いのである。高揚した身体運動による新鮮な気持ちからクラブに加入した生徒たちは、決して怠惰ではないし、たとえ怠惰であったとしても、たちどころに改善されるのである。クラブを導入した学校の体育は、これまで問題なく発展してきた。、私がみてきた限りでは、体育クラブ（生徒の）は学校体育（Schulturnen）を破壊するのではなく、有効に作用している。クラブで行われる自己指導は、自立への一つの教育的な方法となり、また自制は人格の発達の上で効果的な影響を及ぼしている」¹⁵⁾。

つまり、クラブはクラブ員たちに自己決定・自治・自己指導を養わせ、学校生活に活気をもたらしめている。また、クラブは学校体育に害をもたらすどころか、かえって新鮮さ・満足・社交性・仲間同志の友好に役立ち、体育に有効に機能している。更にまた、自己指導や自制は教育的な意味を持つと同時に、生徒の発達の上で重要な影響を及ぼしているとしている。

また、プレスラウの中等学校の教師であるコックも、彼の著書のなかで中等学校の校長ライマンの言葉を紹介しながら、クラブの効果について述べている。

「クラブは体育における全てに有益な影響を及ぼしている、なぜならばクラブ員は“体育を切望する気持ちとその熱心さによって、他の生徒たちの手本となっている、また真剣に見習う時も会員の上手な演技が、彼ら（生徒たち）の励ましになっている”（“ライマンの言葉”）。・・・私は自分の過去4年間の経験を振り返ってみると、私たちの体育クラブは、我々教師や全ての生徒たちにとって、a. 体育上、b. 教育上また道德教育上、

有益であったと言える。その訳は、a. 私たちの多くの学校が抱えるような、体育設備の不十分なことや、大家（体育の）があまり存在しないといったような欠点を、生徒体育クラブが埋め合わせてきたことである。・・・学校体育には特別に育成された組長（Vorturner）^{註3} がいないという欠点があるが、クラブにはそのような事はない。つまり、クラブでは全ての優れた体育家が自分から進んで組長になったことから、これらの欠点は解消されていたのである。b. 教育的・道徳的な利益も重要である。クラブの基本的な柱は、自由意志による服従と仲間意識、そして社交性であり、クラブ内には階級的な排他心といったものは存在していない。・・・また、馬鹿威張りするような非社交的で、平和を乱すような要素もクラブには存在しない。クラブの中での年上の生徒と年下の生徒の関係は、友好的で調和のとれたやり方で、まさに家族の一員同様に交流している。そのためにクラブ員に道徳的で精神的な強さが備わったように思われる。上級生の態度に自惚・覇気のない事・気取り等が無くなり、快活で自然な振舞が戻ってくれば、それはクラブの会員のまさに影響だと言えよう。服従や注意深さ等の進歩に最も重要な要素が、クラブによる育成の中に見いだせるのである」¹⁶⁾。

以上のようにコッタは、既に導入した学校では体育的・教育的・道徳的な効果が現れている事を紹介し、クラブの導入の有効性を述べているのである。

3. 学外の体育組織との交流の懸念

当時の殆ど全ての中等学校は、生徒たちによる学外に存在した市民達の体育組織との交流を好ましい事と受けとめていなかった。例えば、教育学者ドクター・ピルガーは1880年の論文のなかで、生徒の好ましくない生活の実態について指摘しているが、カール・オイラーは1894年に彼の著書の中で、ピルガーの指摘に基づき学外組織との関係について次のように述べている。「クラブ（Vereinen）や学生組織に、参加をする事が何といってもこの当時の傾向であった。しかし、若者たちもそこから冒されており、その事態を心配する校長はこれらの傾向を正しい方向に導こうと試みて

いた」¹⁷⁾。つまり学校側は、当時増加してきた学外の市民による体育クラブに生徒が参加する事について、成人の会員からの悪い影響を懸念して、参加に必ずしも賛成ではなかったのである。

そのことは当時の社会的な状況からすれば、主に反政府的な思想を持った社会体育組織から生徒への政治的な影響を、学校が心配していたためであったことが容易に判断できる。1870年頃よりドイツ国内での労働運動の高揚にともない、体育界でも労働者体育家（Arbeiterturner）による体育活動を通しての政治的組織化が徐々に進行していたために、1894年11月24日プロイセン内務・文部省は、「労働者体育家連盟への生徒の参加の禁止」・「社会民主党員による体育教師資格の取得制限」等の内容を含む通達¹⁸⁾を出しており、明らかに当時の政府や学校が生徒たちへの政治的影響の広がりをおそれていたと言えよう。

V. 学校による生徒体育クラブの導入

こうして生徒の不摂生を取り除くために中等学校で考えられた対応策は、「学校の奨励によって・・・校長の許可を受けて学校で活動する生徒体育クラブの存在であった」¹⁹⁾。まさにそれは、顧問の教師によって管理された生徒のクラブ（生徒体育クラブ、音楽クラブ、文学クラブ等）^{註4}を導入して、不摂生の温床となった無許可の集団に、生徒が集中しないようにすることを狙ったものであった。

また他に、学校によっては生徒の不摂生への対応策としてではなく、とりわけ体育指導に熱心な教師の奨励により、生徒体育クラブを導入したところもあった。例えば、ヴィースバーデンの王立ギムナジウムの体育教師ギュールは、きわめて体育指導に熱心であり、1880年頃から運動に意欲的な生徒たちに、授業以外の時間を使って自由な体育指導を実施していた。小さな体育館に大勢の生徒が集まり続けていたが、集まる生徒の出席が流動的であり、彼らの間に共に行動する意識が一向に高まってこなかった。そのため、ギュールは特に熱心な生徒たちと何時も心を一つにして、決められた規則に従って組織的で堅実な活動をしたいと考えた。そして、1880年10月16日に校長の許可を得て、45人の生徒による生徒体育クラブを誕生

させている²⁰⁾。

また、シュラウベのギムナジウムの教師カール・マッツィアスの場合も、当時の体育雑誌(M. T. 1885年)のなかで、「自分もこの体育雑誌に紹介された中等学校での自由な体育活動に刺激を受けて、自分の所の体育クラブについて報告する」²¹⁾と、掲載記事に触発されたことを示唆しながら、学校に生徒体育クラブを導入したときの様子について述べている。つまり導入の理由については「毎週二回の決められた体育授業の他に、改めて優秀な生徒の体育家(Turner)たちのために、体育的な雰囲気を持った活動の機会を経験させてあげたいという考えと、殆ど同じ思いで自分の所(シュラウベのギムナジウム)でも生徒体育クラブを・・・1884年1月9日に31人の生徒の会員により、校長ベッカーの許可を受けて誕生させた」²²⁾としているのである。また、他に、クラブを導入した結果「身体上や体操をする上で劣っていると思われる生徒たちに、良い意味での幅広い形成をさせることに成功している。・・・我々の監督や指導の下であったが、ともかく学校の授業の時のような先生の声がなくて、極めて新鮮であった」²³⁾としている。

初めて1880年代に生徒体育クラブが、ギムナジウムを初めとする中等学校に導入されるようになった。1880年代の様子を知る統計資料がないために正確なクラブ数を確認することは出来ないが、雑誌資料など(M. T. や著書)から確認されるだけでも、プロイセンには最低12の中等学校に導入されていたことがわかる。^{註5}

VI. まとめ

19世紀末期におけるギムナジウムを中心とする多くの中等学校では、生徒たちが任意の集団をつくり大学生の真似をして、飲酒、喫煙、暴力行為に興じている状況が存在していた。学校側はそれらによる生徒の精神や身体の墮落を非常に懸念していた。また、行われ始めたばかりの体育授業は、まだ多くの学校で教師の数の不足や体育施設の不備等決して十分ではなく、授業を受ける生徒たちに十分な満足をもたらすものとはなっていなかった。そのため多くの生徒は、改めて体育授業以外でも体育をすることを切望していた。こういった

状況のなかで、学校側は次のような目的のために生徒体育クラブの導入を企画していたと言えよう。①生徒の精神や身体を不摂生な生徒集団から守ること。②体育の機会を生徒に確保すること。そして、③クラブの導入によって学校の生徒達に、優れた教育的・体育的効果をもたらすこと。

また問題意識で述べた疑問との関係では、新たに次のことが言えると思われる。(問題意識①、②、③について)当時学校側からすると、生徒の不摂生を改善することが極めて重要な問題となっていたことから、体育への理解を示した教師達が中心となり、午後においてもクラブの世話をしたことを考えることができる。また、体育をすることへの強い欲求を示していた生徒達は、自分から午後においてもクラブに参加をしたと考えることができる。更に地域の社会体育クラブへの参加については、学校が賛成の立場をとっていなかったことから、生徒たちは積極的に参加をしたようには思われえないと言えよう。

註

1. 体育の授業に関するユーバーホルストや成田十次郎による代表的な研究には次のようなものがある。

成田十次郎、「学校・社会体育の成立過程」不味堂、1977

Ueberhorst, H., Geschichte der Leibesübungen, Band 3/2, Bartels & Wernitz, 1982.

尚、生徒体育クラブについて述べた研究には、他に下記のようなものがある。

Euler, C., Geschichte des Turnunterrichts, Gotha, 1891.

Cotta, C., Leitfaden für den Unterricht in der Turngeschichte, Leipzig, 1919.

Gasch, R., Handbuch des gesamten Turnwesens, Leipzig, 1929.

Eichel, W., Geschichte der Körperkultur in Deutschland, Bd III, Leipzig, 1969.

しかしこれらの研究は、生徒体育クラブについて概略的で簡単に述べているだけであり、クラブの誕生や発展の内容について明らかにしていない。

2. ドイツ体育連盟は中央組織を最高位にして、次に全国をクライスと呼ばれる単位に分割し、クライスを更にガウと呼ばれる小さな単位に分割して、ガウにそれぞれ個々の地域体育会（個々の体育クラブのことを指している）が所属する形態をとっていた。
3. 組長（Vorturner）はクラブで体育活動を行う時に、年齢や技能によって会員を7～8人の班に編成する。そして、実際の活動において、組長は全体の班に指示を発する。各班では、組長の指示に従い班長を中心に体育を行う。
4. 生徒体育クラブ、音楽クラブ、文学クラブ、速記クラブ等が、学校によって導入された。しかし、生徒体育クラブは生徒の運動への強い欲求によって、最も人気が高く他のクラブをはるかに上回る数を持っていた。
5. 誕生年・学校の明確に確認されたクラブのみ記載。

（誕生年・場所・学校・主宰者・クラブの種類）

- ① 1882年 ヘッセンのマールブリーレグ
ギムナジウム 生徒体育クラブ
- ② 1884年 ノイヴィード ギムナジウム
生徒体育・ボートクラブ
- ③ 1885年 ヴィースバーデン ギムナジウム
生徒体育クラブ
- ④ 1886年 シュレスウィヒ・ホルスタイン
のイノミュンスター 実科プロギムナジウム
体育教師ハウケ 生徒体育クラブ
- ⑤ 1887年 ビールヘルド 中等学校（学校の
種類不明）生徒体育クラブ
- ⑥ 1888年 ゾーエスト ギムナジウム 生
徒体育クラブ
- ⑦ 1888年 ボッフム ギムナジウム 体育
教師バルデン 生徒体育クラブ
- ⑧ 1888年 ハノーバー ライプニッツ＝実
科ギムナジウム 生徒体育クラブ
- ⑨ 1889年 バールブクク ギムナジウム教
師ファーバー 生徒体育クラブ
- ⑩ 1889年 ヘアーフォールト ギムナジ
ウム 校長ストイスロフ 生徒体育クラブ
- ⑪ 1889年 ベルリン 王立ウェルヘルム＝
ギムナジウム 教師コオールラウシュ 生

徒体育クラブ

- ⑫ 1889年 ブレスラウ ギムナジウム 体
育教師パウマン 生徒体育クラブ

引用・参考文献

- 1) Bernett, H. (1985), Sportunterricht an nationalsozialistischen Schule, Hans Richarz, S. 72-75.
- 2) Jonischeit, L., /Winkelmann, J. (1988), Das außerunterrichtliche Bewegungsleben der Schüler in Schülervereinen für Turnen, Spiel und Sport. In : N. G. John, /R. Naul, Jugend sport im ersten Drittel des 20. Jahrhunderts, Reinhausen, S. 130-152.
- 3) Gasch, R. (1920), Handbuch des gesamten Turnwesens, A Prichers Witwe und Sohn, S. 180.
- 4) Euler, C. (1887), Turnvereinigung auf Gymnasiasten. In : M. T. (Monatsschrift für das Turnwesen), H. 7, S. 200,
- 5) Ponickau, R. (1911), Abstinente Schülervereine, Gohlis, S. 24.
- 6) Kurth, A. (1902), Das Vereinswesen zur Pflege der Leibesübungen an den höheren Lehranstalten Preußens i. z. 1890, In : M. T., H. 2, S. 33-37,
- 7) Cotta, C. (1985), Jahresbericht über das Schuljahr 1894/95, Graß, Barth und Comp, S. 9.
- 8) Cotta, C., Ebenda, S. 9.
- 9) Cotta, C., ebenda, S. 9.
- 10) Kurth, A. (1925), Geschichte der Leibesübungen in den Grundzügen, Wien, S. 149-151.
- 11) In : Jahrbuch Für Jugend und Volksspiele, H. 4, S. 268, 1895.
- 12) Euler, C., Ebenda, S. 200,
- 13) Euler, C., ebenda, S. 201,
- 14) Ponickau, R., Ebenda, S. 24.
- 15) Euler, C. (1894), Enzyklopädisches Handbuch des gesamten Turnwesens und verwandten Gebiete, Wien und

- Leipzig, S. 519.
- 16) Cotta, C., ebenda, S. 11.
- 17) Euler, C., Ebenda, S. 516.
- 18) Erlass des Kgl. Ministeriums des Innern, die Turnvereine betreffend. In : M. T., H. 2, S. 50-51, 1894.
- 19) Euler, C., a. a. O. (1887), S. 201
- 20) Güll. (1885), Bericht über den Gymnasiasten-Turnverein des Königsichen Gymnasiums zu Wiesbaden, sowie über dessen Feier der Fahnenweihe. In : M. T., H. 1/2, S. 56,
- 21) Matthias, K. (1886), Bericht über den Gymnasiasten-Turnverein des Progymnasiums zu Schlawe, In : M. T., H. 1, S. 28,
- 22) Matthias, K., Ebenda, S. 28,
- 23) Matthias, K., ebenda, S. 28,

平成3年4月20日受理